

【公報種別】特許法第 17 条の 2 の規定による補正の掲載

【部門区分】第 3 部門第 5 区分

【発行日】平成 18 年 8 月 17 日 (2006.8.17)

【公開番号】特開 2006-144173 (P2006-144173A)

【公開日】平成 18 年 6 月 8 日 (2006.6.8)

【年通号数】公開・登録公報 2006-022

【出願番号】特願 2004-336714 (P2004-336714)

【国際特許分類】

D 0 6 N 7/00 (2006.01)

B 3 2 B 27/36 (2006.01)

D 0 3 D 15/00 (2006.01)

D 0 3 D 23/00 (2006.01)

D 0 6 M 13/08 (2006.01)

D 0 6 M 13/292 (2006.01)

D 2 1 H 17/10 (2006.01)

D 2 1 H 21/34 (2006.01)

D 2 1 H 27/20 (2006.01)

E 0 4 F 13/07 (2006.01)

【F I】

D 0 6 N 7/00

B 3 2 B 27/36

D 0 3 D 15/00 F

D 0 3 D 23/00

D 0 6 M 13/08

D 0 6 M 13/292

D 2 1 H 17/10

D 2 1 H 21/34

D 2 1 H 27/20 A

E 0 4 F 13/00 B

【手続補正書】

【提出日】平成 18 年 6 月 30 日 (2006.6.30)

【手続補正 1】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0 0 1 1

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0 0 1 1】

本発明によると、建築基準法に規定される燃焼試験において不燃材料または準不燃材料として評価される難燃性能を有するポリエステル繊維壁紙が得られる。その理由については、次のように考えられる。

即ち、燃焼試験において火源となる布帛の目付けが 220 g/m^2 以下であるため、総発熱量を低く抑えることが出来、又、その難燃化に要する難燃剤の使用量が少なくて済み、その難燃剤に起因する有害燃焼ガスの発生量を低減することが出来る。

その布帛を構成する繊維の単繊維繊度を 3 d t e x 未満と極細にするときは、カバーファクターが同じであっても糸条が嵩高に脹らむので、目付けが 220 g/m^2 以下となる低目付の布帛でも裏打紙に対する高い隠蔽性が確保される。

そして、経糸や緯糸の総繊度を 280 d t e x 以下とし、布帛の経糸と緯糸による合計カバーファクターが 2000 ~ 4000 になるように経糸密度と緯糸密度の何れか一方を

緻密にするときは、厚さ100～300 μ m程度のプラスチックフィルムに相当する薄い皮膜状に布帛を構成することが出来、プラスチックフィルムをラミネートしたかの如く布帛が裏打紙に密着し、裏打紙の含有するリン系難燃剤の難燃機能と布帛の含有するハロゲン系難燃剤の難燃機能が相互に補完し易くなり、又、燃焼試験時に炭化した裏打紙によって最高発熱速度が抑えられる。

そして、布帛と裏打紙の間に介在するエチレン酢酸ビニル樹脂系接着剤は、一種のポリオレフィン樹脂であって格別有害な燃焼ガスを発生することはない。

【手続補正2】

【補正対象書類名】明細書

【補正対象項目名】0012

【補正方法】変更

【補正の内容】

【0012】

上記の通り、布帛の目付けと難燃剤の含有量を可能な限り少なくし、布帛を構成する繊維の繊維度と糸条の総繊維度を細かくすることによって、本発明の目的を、達成することが出来る。従って、布帛の目付けは200g/m²以下、好ましくは80～170g/m²とし、布帛の含有するハロゲン系難燃剤の含有量を5g/m²以下に、概して布帛の目付けの1～3質量%にするとよい。

布帛をプラスチックフィルムのように薄い皮膜状に構成するためには、経糸と緯糸を構成する繊維の単繊維繊維度を2d tex以下とし、経糸と緯糸の総繊維度をそれぞれ200d tex以下とすると共に、経糸密度と緯糸密度の何れか高密度となる一方の糸条の総繊維度を100d tex以下とし、その高密度となる一方の糸条によるカバーファクターが1200以上になるように、その一方の糸条の繊維密度（経糸密度と緯糸密度）を設定する。

経糸密度と緯糸密度は、概して27本/cm以上とし、その経糸密度と緯糸密度の何れか一方の密度が55本/cm以上とするとよい。

燃焼試験時に総発熱量を低く抑えるためには、裏打紙の目付けも80g/m²以下にすることが好ましい。